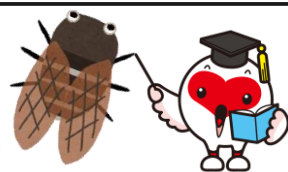


夏の風物詩『セミ』の生態



日本の夏を代表する生き物「セミ」。新潟でも真夏日（最高気温が30℃以上）が何日も続き、セミの鳴き声が盛んに聞かれるようになってきました。成虫になってから約1週間で死んでしまう儚（はかな）い昆虫として有名ですが、その生態については、知られていない部分も多いのではないのでしょうか。今回は、セミの生態についてご紹介します。

実は長寿?! 一生のほとんどを地下で過ごすセミ

セミは、カメムシ目（半翅目）の昆虫で、蛹（さなぎ）にならず、幼虫から直接成虫になる「不完全変態」の昆虫です。成虫になったセミの寿命は、1週間程度（長くても2週間ほど）なので短命のイメージがありますが、幼虫時代を含めると、セミは昆虫の中では長寿な部類に入ります。

卵は、枯れ木や枯れ枝に産み付けられますが、孵化するとすぐに土の中へ潜り、そこで数年間を過ごします。この期間は種類によって異なり、ツクツクボウシが1～2年、アブラゼミで3～4年、中には北米の周期ゼミのように17年にも及ぶ種もいます。羽化するまで基本的に地上に出てくることはありません。土の中では、木の根から汁を吸って成長します。木の根から得られる栄養が少ないため、成長に非常に時間がかかると言われています。

羽化の準備ができると、幼虫は木の幹や葉の上に登り、脱皮して成虫になります。夕方から夜にかけて、地中から出てきて、一般的に2～4時間程度で成虫になります。そして、成虫になったセミは限られた時間の中で、ひたすら子孫を残すために活動します。オスは大きな声で鳴いてメスを呼び、交尾を終えるとメスは木の幹に卵を産み付けます。



鳴いているのはオスだけ?!

セミが鳴くのは、主にオスがメスを誘い、子孫を残すためです。オスのお腹には「発音膜」や「共鳴室」といった特殊な器官があり、発音筋を振動させることで大きな音を出します。この鳴き声は種ごとに異なり、メスは自分の種のオスが奏でる求愛の歌を聞き分けて、交尾相手を選びます。

メスは卵を産むための「産卵管」を持っており、オスのような発音器官は発達していません。そのため、大きな音を出すことはありません。短い成虫の期間に効率よくメスと出会うため、オスは懸命に鳴き続けるのです。

日本の主なセミと鳴き声図鑑

私たちが耳にするセミの鳴き声は、それぞれ種類が異なり、鳴く時間帯にも特徴があります。いくつか代表的なセミをご紹介します。



・クマゼミ 「シャワシャワシャワ」「ワシャワシャワシャ…」

主に西日本に多く生息しており、非常に大きな声で鳴きます。ヒートアイランド現象によって生息域を広げているとも言われています。

・ミンミンゼミ 「ミーンミンミンミー」「ミーンミーンミーン…」

透き通るような美しい鳴き声で、「ミーン」という伸びやかな音が特徴的です。こちらも昼間によく鳴き、特に森や林で多く見られます。

・アブラゼミ 「ジージリジリジリ」「ジジジジジ…」

油を揚げるような音に例えられ、日本の都市部で最もよく聞かれるセミの一つです。昼間によく鳴きます。

・ヒグラシ 「カナカナカナ」「カナカナカナ…」

夕方から夜にかけて、または明け方に美しい声で鳴きます。「カナカナ」という物悲しい響きは、夏の夕暮れを一層印象深くします。

・ツクツクボウシ 「ツクツクボーシ、ツクツクボーシ」「オーシツクツク…」

複雑でリズムカルな鳴き声の特徴です。夏の終わってから秋にかけてよく聞かれ、その鳴き声が季節の移ろいを教えてくれます。

